The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期レヴィナスにおける存在についての諸論考
Author(s)	西田, 充穂
Citation	メタフュシカ. 2004, 35, p. 27-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8285
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期レヴィナスにおける存在についての諸論考

西田　充穂

レヴィナスの哲学において、「責任」に代表されるいわゆる「倫理」的な概念が表立って論じられるようになるのは1950年代以降のことである。倫理的な議論の前景化は、存在論批判というレヴィナス哲学の方向性が明確にされるのと軌を一にしている。

本論では倫理的な概念が主題化される前の論考を取り上げ、レヴィナスの存在観といったものを確認する。レヴィナスは、後に西欧哲学全体を「存在論」[1]と一括し、それを批判の的として存在に対する倫理という構図を打ち出す。そのような議論が展開される以前の、つまり、存在についての初期の議論を辿ることで、存在についての議論の枠組みを概観し、存在の問題系に関するレヴィナスの解釈の基本型を取り出すことが出来よう。

存在からの逃走

レヴィナスは、完全なる存在を善として肯定する議論、他なるものの一切を主体の権能の下へと還元することになる同一者の理論を一括して「存在論」と見なす。それを批判対象と目するレヴィナス哲学の特徴の一つとして、そのように解釈された存在論における存在からの離反の試みを指摘することが出来よう。存在からの離反を存在からの「逃走」として考察した『逃走論』はそのような試みの端緒となっている[2]。そこで問われているのは、存在における「完全－不完全の区別」を超えた「存在するという事実そのもの」、「存在は存在する」という事実である(DE93)。

存在という問題をどのようにして捉えていくのか。以下には存在についてのレヴィナスのおおよ

1　レヴィナスが「全体性」と称して、批判する対象は二つの型に大別できるという（関根、「レヴィナスの全体性批判」をもとに改編）。
　全体性A：自己拡張型　権能の主体の拡張　フッサールへの認識論批判
　全体性B：自己消失型　非人称の普遍的な存在への解消　ハイデガーの存在論批判
レヴィナスは、いわゆる存在論（全体性B）だけでなく、認識論（全体性A）の議論もまた、「存在論」として批判する。

2　レヴィナスは、「逃走」というモチーフを文芸批評から借用したと述べている。その際、「逃走」を現代文学が明らかにした「奇妙な不安」であり、「存在の哲学に対する最も根底的な糾弾のようなもの」と解釈している (DE94)。

その考え方が示されている。

「存在(existence)は他の何ものにも準拠せずに自己を肯定する絶対者である。それは同一性である。しかし、この自己自身に準拠することにおいて、人間は一種の二元性を見分ける。…自我の同一性において、存在の同一性は繋縛(enchaînement)というその本性をあらわにする。というのも、自我の同一性の中で、存在の同一性は苦痛(souffrance)として現れ、逃走へと誘うからである。したがって、逃走は自己自身から脱出しようとする欲求であり、言い換えると、もっとも根底的で、もっとも仮借のない(irrémissible)繋縛、自我が自己自身であるという事実を断ち切ろうとする欲求である。」(DE98)

自我が自己自身であるという自我の同一性において、存在の同一性が苦痛として現れるため、それから逃れること――逃走が求められる。そもそも、存在の同一性は絶対的に充足しており、他の何ものにも準拠していないので存在すること自体に付加されるべきものは何もない。そのため、存在するという事実は端的に肯定されている(DE93)。レヴィナスの主張は、このような存在の同一性に二重性を見るというものであり、問題はこの存在の同一性がはらむ二重性とは何かということである。

『逃走論』の「逃走」とは、自我の同一性のうちにある存在の同一性の繋縛から逃れようという「欲求(besoin)」として規定される。欲求は、後の考察では欲望(désir)と対比される概念であるが[3]、ここでは同一性へと回収されることのない何ものか、何ごとかへの希求であるという点を確認しておく。一般的に、欲求とはその解消が追求される限りでは、満たされるべき何らかの欠如を前提とした概念である。しかしながら、レヴィナスは欲求を欠如とは関係づけない。レヴィナスによれば、欲求とは積極的な何ものかとの関係である。仮に、欲求の基底に何がしかの欠如が見い出されるとしても、さらに、欲求が存在と密に結びついているとしても、欲求によって見出される欠如は存在の欠如を意味していない、とレヴィナスは言う(DE101,105)。

先の引用において、レヴィナスは存在の同一性を示す様相として「苦痛」を挙げていた。したがって、欲求とは存在の同一性としての苦痛からの解放を求めることとなる。しかし、苦痛は欲求を満たすことによっては解消されない。なぜなら、欲求の基底にあるものが存在の欠如ではなく、存在の充溢(plénitude)であるからである(DE120)。そしてこの存在の充溢は、存在の根底における自分自身にとっての重荷であり(DE106,114)、自己自身に釘付にされ、自己自身に閉ざされている存在の肯定そのものである、とレヴィナスは考えるのである(DE115-6)。

存在を超える善、存在における悪

『逃走論』では、存在の同一性である苦痛からの解放を目指すことが論じられていたのであるが、

[3] 『全体性と無限』では、他者への希求である「欲望」と他なるものへの希求である「欲求」とが区別される。欲望についての議論は、同著の第一部第一章から始められている(TI pp. 21 et ss)。

『実存から実存者へ』では、存在をめぐるレヴィナスの善ー悪についての考えが明確に打ち出される。その冒頭では、まず善についての言及が見られる。同書の課題が善を論じることにあるとの表明に続いて、レヴィナスは善についての「もっとも一般的で、もっとも空虚な指標」として「＜善＞を存在の彼方に位置づけるプラトンの形式」を参照項に挙げている。レヴィナスはしばしば、プラトンの観念に訴えて「存在に対する＜善＞の超越」、「＜存在＞の彼方なる＜善＞」(TI326)を目指して超越を論じるのであるが、それはもっぱら「形式」としてのことにすぎない。その形式の意味するところは次のように述べられる。

> 「存在者を善の方へと導く運動は、存在者を高次の存在へと高める超越ではなく、存在とそれを記述する様々なカテゴリーから外へ出ること、つまり、過ぎ越し(ex-cendance)であるということである。しかし、過ぎ越しも幸福も存在に根ざしており、それゆえ、存在することは存在しないことよりもよいのである(être vaut mieux que ne pas être)。」(EE 序文、強調引用者)

ここですでにレヴィナスが論じるべき問題の困難が窺える。先に見た逃走は、存在の充溢とそれによる拘束がその出発点であった。それと同様にここでも、何ものにも準拠することのない存在がまず議論の出発点になるのである。すなわち、存在のカテゴリーからの逸脱を目指しながらも、その逸脱自体が、そもそも存在を前提せざるを得ない、という当然の事実が確認される。

存在は非存在との比較を通じて優位にあるという意味で、上位の価値「よりよい」と評されるのではない。レヴィナスにおいて、存在をめぐって立てられる善ー悪は価値判断ではない。また、「よりよい」というあり方は、完全性における存在の追求ではなく、存在者と存在との関係性において示されるものである。加えて、よりよいというあり方は、世界と存在の主体と化した存在者との関係性においてではなく、他者と存在者との関係性に求められる。レヴィナスにおいて、世界との関係に肯定的な価値を認めることができるのは、その関係の基盤として、他者との関係があるためである。したがって、善とは、他者との社会的な関係において追求される問題になっているのである。

このような善に対し、「存在における悪」についての言及が見られるのは同じく『実存から実存者へ』の序章においてである。その際、批判の対照項として挙げられているのはハイデガーの存在論である。それは「存在と無の弁証法」の下にあり、「悪を欠陥、欠乏、つまり、存在の欠如すなわち無」と解しているという点で批判される(EE20)。これに対して、レヴィナスが問い質そうとするのは「悪が欠如であるという観念」であるという。レヴィナスは「存在はその限界や無とは異なる瑕疵(vice)を含んでいないだろうか。存在の積極性そのものには何らかの根本的な悪(mal foncier)がないだろうか」(ibid.)と言う。つまり、存在の欠如を悪とみなすのではなく、存在そのものに悪があるのではないか、と問うのである。

すなわち、存在をめぐる善ー悪について、存在と非ー存在、あるいは、存在の完全性と不完全性といったことが問題とされるのではない。レヴィナスが論じるのは、存在自体に悪が見出されるという問題であり、存在論批判はこの点から始められる。

そもそも「存在するという事実はすでに完璧である」(DE101)と考えられている以上、存在論にお

いて悪となる存在の欠如や不完全な存在ということは意味をなさない。レヴィナスが存在の欠如や有限性を悪とみなさないのはこのためである。そしてレヴィナスは「存在とは存在するという悪(le mal d'être)である」と断言する(EE28)。これはレヴィナス自身の存在観の表明であると言えよう[4]。だからこそ、レヴィナスが問い質すのは、存在するということに含まれている「自分自身にしか準拠しないこの肯定の絶対的性格」(ibid.)なのである。

存在と存在者の関係について——契約と文法

『存在から存在者へ』、『時間と他者』においても、先に確認したようなレヴィナスの存在観を基にして、消極的な仕方で存在との関係性を論じる別の手続きが示される。ここでも、議論のポイントはハイデガーに抗してなされる存在者と存在の関係についての解釈にある。

レヴィナスの議論はまず存在論的差異についてのハイデガーの議論を確認することから始められる。そして、ハイデガーの議論をなぞるように、存在者と存在の分離(séparation)を維持することの困難さ、存在を存在者の中で考える傾向を認めた上で、レヴィナスは次のように述べる。

> 「『存在者』と『存在』の関係は独立した二項の結びつきではない。『存在者』は既に存在と契約しているので、それを切り離すことはできない。」(EE16)

ここで言われている「契約」とは、存在と存在者との間に、債務の履行を要請するような義務関係を見ることである。レヴィナスは契約という観点から、存在者が存在することにおいて、存在しなければならないという義務を取り出す(EE31-2)[5]。

レヴィナスの存在論批判は、単に退けるべき悪として存在の否定を目指すものではない。その批判はつねに批判対象である存在の根深さをまず認めることから始められる。そのうえで、件の存在をどのようにして捉え直すのかが論じられるのである。それゆえ、ここにおいても、批判の対象となる存在が議論の出発点としてまず取り出されているのである。

さらに、存在者と存在の関係は、文法概念によっても解釈される。『存在から存在者へ』では、存

---

4 レヴィナスの存在をめぐる善ー悪は以上のように設定される。しかし、レヴィナスの言う善ー悪とは、果たして存在にそもそもそなわっている価値なのだろうか。というのも、レヴィナスの批判する従来の形而上学が存在を善とみなしていたのと同様に、存在それ自体が悪であり、一方、存在を超えることを善とみなすのはともに自明なことではない。

この存在と悪との同一視は、レヴィナス哲学の根本的なテーゼである。しかし、「存在一般、つまり、イリアの本来的邪悪さは、証明不可能である」と言われている(Didier Franck, *Dramatique des phénomènes*,PUF,2001, 90-91)。ところで、レヴィナスはイリアをそこから存在者が成立するという意味において、物質ないし質料と同一視しているようである。だとすれば、存在一般であるイリアに悪を見出すのはそれほど突飛な着想・主張ではないと言えるだろう。

また、レヴィナスが「他者」や「倫理」を論じる仕方について、谷徹氏は「それなりの《理由》」、「それなりの《正当性》」を認め、イリアを悪となすレヴィナスの構えを「原罪の形而上学」と名付けている(谷徹『意識の自然』勁草書房、1998 年、588 頁、653 頁)。

5 D.フランクは、この「契約」という言葉の意味が、「不安定で、曖昧で、矛盾してさえいる」と強調する。そして、存在者と存在との間に契約関係を見ることは、「なぜ無よりもむしろ存在があるのか、という問いを私は存在する権利を持つのかという問いに従属させることになる」と言う(Didier, *op.cit.* 80)。

在と存在者との差異を動詞と実詞との差異を重ねて考えるということである。そうすることによって、レヴィナスは両者の間に支配関係を見るのである。つまり、主語ないし実詞である存在者の属詞（…デアル）への関係は、存在するという動詞への主語による支配である。そしてこのような支配ー被支配の関係が存在者から存在に向けても作用しているという[6]。

すなわち、このような存在と存在者との関係は既に確認したように、その分離の維持が困難なものである。そこで、レヴィナスの存在についての考察は、両者が密接な関係をもって与えられるある瞬間、始まりという瞬間へと向かう。レヴィナスはこの始まりの考察の後に、始まりの瞬間以前、存在者の成立以前のイリアへと遡及する。以下ではその順を追って行く。

存在の引き受けをめぐって——怠惰、努力、疲労

存在者が存在し始めるという瞬間を、レヴィナスは存在を拒絶する出来事として論じる。これは存在の引き受けという意味での行為をめぐる瞬間についての考察である。存在との関係は、始まりの瞬間において分節化される出来事として、怠惰(paresse)、努力(effort)、疲労(fatigue)といった概念を通して論じられる。

この始まりについての考察はまず、始まらない、始めないという開始の否定から着手される。この否定は、自ら始めることはできないという開始の不可能性でもある。そのため、行為の始まりに結びついており、かつ、行為の開始を拒否する怠惰がこの考察の起点とされる。怠惰は「行為への拒否」、すなわち存在を引き受けることの拒否である限りで存在の「開始の不可能性」(EE34)である。しかし、怠惰は行為の不可能性ではない。というのも、怠惰はある行為をしなければならないという義務、つまり、存在しなければならないという義務を前にした行為の開始への拒否である。しかし、怠惰はそれが克服可能であるからこそ、後ろめたさをともなっている(EE33)。怠惰が「〔人を〕まいらせ、無為が重くのしかかり、煩わしい」(EE37)のはそのためである。こうした後ろめたさや煩わしさが行為の開始のための努力を生じさせる。つまり存在しなければならないという義務が課せられており、その拒否には後ろめたさがともなうため、存在することの努力が強いられるのである。

レヴィナスは始まりについて次のように述べている。

> 「始まりの瞬間には既にして何かしら失うべきものがある。というのも、——たとえそれがこの瞬間それ自体でしかないとしても——何ものかが既に所有されているからである。始まりはただ単に存在するだけではなく、自分自身への回帰において自らを所有する。行為の運動は目的に向かうと同時に自らの出発点の方へ屈折し、そうしてこの運動は存在すると同時に自らを所有する。」(EE35-6)

ここでレヴィナスは、存在の始まり、それを引き受けて存在するという行為の開始において、存

6　このような関係は現象学的分析では解明できないとされる(EE16)。

在することと自らの存在を所有することとに二重化した事態として理解している。この二重化をはたす「自己回帰」、「出発点への屈折」は、怠惰に反して始まりの瞬間を成立させる努力とそれを弛緩させる疲労――これについては後に述べる――によってもたらされる。

存在の引き受けを拒むことで開始を拒否する怠惰に対し、努力は存在を引き受けることによって行為の開始を遂行する。しかし、怠惰によって始まりが回避されているために、努力は「担うべき瞬間への遅れ」(EE48)をもって存在を開始する瞬間を成立させる。

努力によって成立したこの瞬間を現在という時間へと結びつけるのが疲労である。しかし、「疲労の根本形式」は「存在が自分自身の執着しているものと不断にますます食い違っていく」(EE42)ことにある。つまり、疲労とは「存在と自分自身との食い違い」(EE43)[7]であり、存在を始める時点ですでに、怠惰に由来する遅れ、食い違いが疲労となっているのである。

この始まりについての考察で言われていること。それは、存在とは、積極的に引き受けられるのではなく、むしろ可能であるならば、その引き受けを、存在を回避したいということである。しかし、存在の拒否を貫くことはできない。というのも、存在には義務が含まれているからである。そして、この拒否は覆すことができる、つまり、消極的な仕方ではあれ、存在は引き受けることができるために、この拒否には後ろめたさがある。ここから、存在の引き受けへの努力が導かれるのであるが、存在の開始には「担うべき瞬間への遅れ/自分自身の執着しているものとのずれ」がある。そのため、存在するという行為の始まりにおいて既に存在者は疲労しているのである。

以上の考察から理解しうるのは、やはり、存在という問題についてのレヴィナスの姿勢である。つまり、存在することを端的に肯定すること、存在を善とみなすことはできない。だからといって、存在とまったく無縁であることもできない。そのために、積極的な仕方ではないものの、存在には関わらざるをえない、ということである。

存在という恐怖について――イリアの経験と実詞化

存在の引き受けを経ることで、存在者は成立する。したがって、存在者の成立が論じられるのは、以上で考察された存在の引き受けをめぐる始まりの瞬間の後に生じる出来事としてである。存在者の成立は存在することの主語（=実詞）の成立である。このとき、存在の主体となる存在者は、存在を支配する主人であると同時に、義務契約の履行として存在を引き受ける存在の従属者でもある。レヴィナスはこの存在者の成立について「動詞によって表現される行為が実詞によって示される存在となる出来事」を示す言葉(EE141)として、「実詞化(hypostase)」という文法上の概念を当てる。

この実詞化が出来事として生じる場は「イリア(il y a)」と規定される。このイリアは一切の存在が無くなったと仮定する「想像的破壊」(TA25)によって取り出される(cf.EE93)。存在するもの一切の無化の果てに、もはや否定することの出来ない何ものかがあるという。仮説に基づいて取り出されるこの「何ものかがある」とは、誰のものでもない存在という意味で、存在者なき存在、剥き出しの存在である。そのため、この存在のありようは主語であるような誰かとは無縁な仕方であり、実

[7] 疲労は後に、存在を中断させる能力として、「睡眠」や「無意識」として展開される(EE107 et ss)。

詞となるような何ものもなく、不確かではあるが「何かが起こっている」という仕方で述べられる。「イリアは人称的形式をなすことの拒否において『存在一般』である」(EE94)。この意味で、イリアとはこれまでに見てきた存在論批判の出発点をなす存在の謂いである。

レヴィナスはさらに、仮説から導かれたこのイリアを経験する可能性を問い、それを夜の経験になぞらえる。存在者が身を置く世界経験もまた、イリアを取り出すための手続きである想像的破壊を経ることによって無化されている。こうして無効化された経験は、輪郭や形式の消失・溶解として述べられる。

その一方で、仮説によってイリアが取り出されたように、一切の無化の後にも否定しつくされることのない経験が確保される。この経験については奇妙な沈黙や圧迫が言われる。

> 「それは空虚の密度のようなもの、沈黙の呟きのようなものである。何もない、けれど何かしらの存在が力の場のようにしてある。闇はたとえ何もないとしても作用するであろう存在の働きそのものである。」(EE104)

イリアは誰のものでもない力の場、重苦しい雰囲気、それを否定しても普遍的なものとして回帰する存在である(EE95)。レヴィナスはこのようなイリアの経験を恐怖であると言う。それは名状しがたい何ものかに触れ、それにとらわれることの恐怖である。しかし、イリアは存在者の成立以前へと遡ることで得られた境位であり、一切の無化が想定された時点で、恐怖を覚える主体といったことはもはや考えられていない。したがって、イリアの恐怖とは、非人称の存在の回帰が純然たる恐怖であることを意味している。この恐怖は、「ハイデガーの不安が見出す純粋な無」[8]に対置され、レヴィナスは存在そのものに恐怖を見るに到る(EE102)。

恐怖とは、その解消が求められるような否定的な価値をおびた経験である。イリアの経験や存在そのものが恐怖とされるのは、イリアが確保された次元のためである。イリアは存在者の成立以前にあり、イリアへの遡及は、非人称の存在そのものへの遡及である。このようなイリアの経験は、存在者にとってそれ以前に具わっていると考えられる主体の主体性、存在者の個別性を覆す経験となる(EE100)。つまり、イリアの恐怖はレヴィナス自身が設定する仮説の構造によるものである。

イリアはさらに、存在に恐怖を見出すという点にも関連している。非人称の存在であるイリアが存在一般と解されるのは既に確認した通りである。そのうえでレヴィナスは、イリアと存在者との関係を普遍と個との関係と捉えるのである。ところで、個別的な存在者を普遍的な存在一般へと還元するあり方こそ、レヴィナスが全体性と称して批判する事態である。ここで問題となっているイリアは、存在一般であり、非人称の存在の遍き拡がりとして不断に回帰する。存在者にとって、その回帰は普遍的な存在との一体化、普遍的な存在への解消を意味する。このようなイリアの解釈から、存在そのもの経験はイリアのそれと同一視され、恐怖と目されているのである。

---

8 無は虚偽概念として退けられているわけではない。レヴィナスは無を存在の否定や限界ではなく、普遍的な存在に生じる「間」あるいは「中断」として考えており、この間ないし中断は、実詞化という概念によって述べられる存在者の成立の条件になっている。

恐怖がそこからの回避が求められる経験であるように、イリアの恐怖もその解消が求められる。この恐怖の解消をはかるのは、存在者の成立を示す実詞化である。というのも、「実詞化によって、無名の存在はイリアとしての性格を失う」(EE141)からである。つまり、実詞化とは、仮説によって無効にされた存在者の個別性や主体性を回復させる仕組みになっているのである。したがって、実詞化と想像的破壊によるイリアへの遡りとは、非人称の存在をめぐって、存在者の成立とその解体というような対をなす関係になっているのである[9]。

イリアないし存在に見出された恐怖の解消は、実詞化に求められる。しかし、これは存在者にとっての恐怖がまったく無くなるということを意味してない。というのも、実詞化が存在者の成立という出来事を示す概念であるのは、存在の主人であると同時に存在への従属者としてのことであった。つまり、実詞化によって存在者と存在とが切り離されるのではない。実詞化とは、あくまでも存在と存在者の両義的な関係を意味する概念である。したがって、実詞化は非人称の存在からの解放として、存在の恐怖を鎮める方途ではある。しかし、それは存在そのものにある恐怖についてはいかなる変更ももたらさない。

存在論批判として整えられて行くレヴィナス哲学は、当然のこととして、独自の哲学を展開するその予備的な段階から存在を問うものであった。これは、従来の存在についての議論が自明視していた前提を疑問視することから始められた。つまり、完全なる存在を善と見なすことは、存在に対する一つの態度ではないのか、と。したがって、レヴィナスの議論において、存在は無条件に肯定されるものではない。そこで、存在についてのレヴィナスの考察は、存在の同一性に苦痛を見出し、存在の欠如や不完全性にではなく、存在それ自体の充溢に悪を認めることになる。だからといって、存在は容易に否定したり、無化しうると考えられているわけでもない。存在は極めて消極的な意味をもつ出来事として取り出されるのみである。レヴィナスの初期の論考では、この点が様々な仕方で繰り返し確認される。

そして、存在者が存在することにおいても、存在の否定や拒否が求められるのではない。そもそもそれは不可能なことである。レヴィナスがまず認めるのは、存在が払拭しがたいということ、存在と存在者との関係が不可分であるということである。法的関係や文法的関係によって、あるいは、行為の開始という場面を用いて、存在者と存在との関係を考察することから導かれたのはこのことである。さらには仮説によって、決して否定しえない存在の次元を見出し、イリアの概念を得る。レヴィナスはこの概念を手にしたことで、 批判の的として定める存在のあり方――存在の同一性――とその淵源を定式化した。存在についてのこのような議論を重ねることで、存在の同一性というあり方からの解放を指向するものとしてレヴィナス哲学は確立されるのである。

---

[9] イリアは仮説によって得られた次元であるのだが、そこから実詞化が生じる理由を問うことは出来ず、実詞化の意味を述べるだけであるとレヴィナスは言う(TA31)。

Emmanuel Lévinas の著作略記号

DE：*De l'évasion* (1935) Fata Morgana, 1982

EE：*De l'existance à l'existant* ,VRIN (1963, 1977, 2e éd. augumentée)1990

TA：*Le temps et l'Autre* (Fata Mrgana,1979) PUF, 1983

TI：*Totalité et Infini* (Martinus Nihhoff,1961) KLUWER ACADEMIC, 5éd.,1993

参考文献

池上明哉「レヴィナスにおける存在論から倫理への移り行き」、『哲学』（三田哲学会）87、1988、12

――「レヴィナスの「存在」観」、『哲学』（三田哲学会）91、1990、12

関根小織「初期レヴィナスの現象学研究－『全体性と無限』形成への観点から」、『現象学年報』19、2003

――「レヴィナスの全体性批判－フッサール、ハイデガ-批判における全体性の二義性」、『現象学年報』14、1998

Catherine Chalier, "Ontologie et mal", in *Emmanuel Lévinas, L'éthique comme philosophie première*, Cerf, 1993

（にしだみつほ　哲学哲学史・博士後期課程）

A propos des premiers écrits sur l’être chez Lévinas

Mitsuho NISHIDA

Le prima de l’éthique par rapport à l’ontologie, voilà la formule courante par laquelle on résume la philosophie de Lévinas. Toutefois, avant de préciser sa pensée en tant qu'éthique, avant d'insister sur l’éthique, pour lui, au départ, il y avait l’être. Dans cette étude, nous allons nous intéresser aux premiers écrits de Lévinas concernant l'être et en examiner la forme fondamentale et caractéristique.

Son argument sur l’être se fonde sur l’idée du mal de l’être ou du mal qui est au fondement de l’être. Cette idée du mal en l'être est examinée de la façon suivante : d’abord Lévinas questionne “l’idée que le mal est défaut”, l'idée qui considère l’être parfait comme bien. Et puis, il se demande s’il n'y a pas «quelque mal foncier» dans la positivité même de l’être. Mais ses considérations sur l’être ne le conduisent pas à le nier. Parce que Lévinas dit que “le fait d’être est d’ores et déjà parfait”, et admet que l’être est indéniable. Mais ce n’est pas affirmation entière de l’être, Lévinas n’affirmant l’être que négativement. Ainsi la philosophie lévinasienne cherche *l’évasion* hors de l’être comme une fuite hors du mal.

A partir de cette conception de l’être, il traite à plusieurs reprises l’être indéniable comme mal ou comme quelque chose de négatif. Lévinas considère le problème de l’être non pas en fonction d'une comparaison avec le néant ou le manque d’être, mais le traite en tant que commencement de l’être appréhendé du point de vue de l’action. En outre, en utilisant les termes grammaticaux et la notion de contrat, il traite la relation entre l’être et l’étant. Il y trouve l'être assigné comme devoir ou obligation, l'être inévitable. Chez Lévinas, c’est aussi la question du *sujet/sujetion* de l’être, pour laquelle il introduit des notions nouvelles : *il y a* et *hypostase*. La notion de *il y a* désigne le fait d'«être en général» ou d'être antérieur à la formation du sujet; celle de *hypostase,* désigne un événement qui est l'orientation du sujet né à partir de «il y a ». En outre, ces notions sont conduites sur la base de l'hypotèse d'un moment négatif, la destruction imaginaire de toute chose. C’est au travers de cette négativité, de cette destruction que Lévinas tire la notion de *il y a*, ordre de l’être antérieur à la formation du sujet.

「キーワード」
存在、イリア、実詞化